ISSN 0289 − 4130

研究紀要

第30号

—設立35周年記念—

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 —関東・中部地方の事例研究— 尾田　識好

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 古谷　渉

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 中川　莉沙

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について 松浦　誠

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 上野真由美 柴田　徹 西井　幸雄 麻生　敏隆 坂下　貴則 小茂田　幹 大屋　道則

埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 山田　琴子 上野真由美 赤熊　浩一 小林まさ代 大屋　道則

関東地方における周溝持建物の系譜 福田　聖

埼玉県における横穴式石室の分類と編年 —無袖石室と片袖石室を対象に— 青木　弘

北武蔵児玉地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ 山本　良太

盾持人埴輪頭部の分類と変遷について 長谷川啓子

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察 —埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に— 渡邊理伊知

古代寺院における食堂院の構造 —平城京遷都後の官寺を中心に— 香川　将慶

2016

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

序

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 …… 尾田　識好　（1）
　―関東・中部地方の事例研究―

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 …… 古谷　　渉　（19）

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 …… 中川　莉沙　（37）

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について …… 松浦　　誠　（57）

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 …… 上野真由美
柴田　　徹
西井　幸雄
麻生　敏隆
坂下　貴則
小茂田　幹
大屋　道則　（69）

埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 …… 山田　琴子
上野真由美
赤熊　浩一
小林まさ代
大屋　道則　（79）

関東地方における周溝持建物の系譜 …… 福田　　聖　（87）

埼玉県における横穴式石室の分類と編年 …… 青木　　弘（107）
　―無袖石室と片袖石室を対象に―

北武蔵児玉地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ …… 山本　良太（135）

盾持人埴輪頭部の分類と変遷について …… 長谷川啓子（149）

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察 …… 渡邊理伊知（163）
　―埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に―

古代寺院における食堂院の構造 …… 香川　将慶（181）
　―平城京遷都後の官寺を中心に―

古代寺院における食堂院の構造
—平城京遷都後の官寺を中心に—

香川　将慶

要旨　今回は奈良時代平城宮遷都後における官寺を中心とした古代寺院の食堂で行われた儀式や遺構に関する分析を行った。近年は興福寺や西大寺等の南都諸大寺で、食堂に関する遺構が、発掘調査により明らかになりつつある。食堂は僧侶の食事をする空間だけでなく、布薩や拝堂などを行った儀式空間としての機能を兼ね備えていたため、食堂や大炊殿等の中核を占める建物は、仏教建築であることや礎石立ちであることが明らかになった。また、平城京遷都以前は食堂を講堂の北側に配置するが、遷都後は食堂院を講堂の東側に配置することが主流になる。これは、藤原京から遷都する際、寺院占地の変化によるものと考えられる。地方官寺である国分寺でも食堂と思われる建物跡が検出され、平城遷都後の食堂院のスタイルにする国分寺も確認されるが、講堂の北側に食堂を配置する従来の形を踏襲する国分寺もあり、地域によって様相が異なることが分かった。

はじめに

古代寺院に関する研究は、これまでに多くの遺構・遺物・空間論など多岐にわたる研究が行われている。その中でも、食堂に関する研究は、確認された遺構が少ないこともあり塔や金堂の研究と比べても研究の予知がある分野である。本論では、平城京遷都後の官寺を中心に食堂の様相について述べたい。

第１節　食堂の機能

古代寺院での食堂は単に食事をする場ではなく、数多くの仏教的儀礼を行う場として重要な空間であった。食堂における儀礼については吉川真司氏によってまとめられている（吉川 2010）。主に、食堂で行う儀礼として斎食や布薩、拝堂、集会といったものが行われている。僧侶が食事を行う際も斎食と呼ばれる仏教の規律に基づいて食事を行っている。斎食とは僧侶集団が仏教的規範に従い、日に一度の正式な食事をとることは、食堂で行われる儀礼の中核をなすものである。これは、東大寺修二会の「食作法」が現在にまでその儀式を伝えている。

また、この儀礼は東大寺二月堂食堂で行われるが、ここには賓頭盧尊者という仏像がまつられている。賓頭盧尊者の役割は行事参加者に戒をあたえ、秩序を与える役割である。東大寺修二会を完遂するために、その始まりあたって練行衆は戒を授からねばならない。彼らは深夜の食堂に入り、まず練行衆の上首である和上が賓頭盧尊者像の前に進んで、無言で戒を受ける。そして和上は自便の座に戻り、残りの全員に戒を授ける。このように、賓頭盧尊者は上人よりも優れた存在＝聖僧として、僧侶集団に秩序を与える機能を果たしているとしている（堀池ほか 1985）。古代寺院では、月に２度僧侶全員が集まり、賓頭盧尊者などの仏像から戒律を与えられ誓う儀礼があり、これを布薩という。この布薩という儀礼が行われた空間は、古代寺院においては原則として食堂であったとされる（藤井 1994）。

その他に、食堂で行われる儀礼として平安時代の事例が、いくつか挙げられている。東大寺食堂で行われる年中行事の一例として、正月１日・３

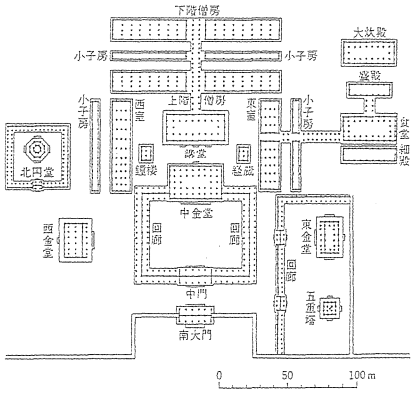
月3日・5月5日・7月7日・9月9日に行われた節供がある。また、臨時儀礼として、別当拝堂が挙げられる。拝堂とは別当就任時の儀礼で、新たに任命された別当が寺内諸堂を巡礼し、吉書・饗禄などの儀を併せ行うものである。そして、拝堂儀礼の中心となる場は食堂であった。

このように、食堂では日ごろの食事だけでなく、年中行事に沿った儀礼や臨時儀礼を行う古代寺院の中でも重要な空間であったことが分かる。食堂内に賓頭盧尊者像を安置していたことを考慮すると金堂・講堂と同様に仏堂建築であった可能性がある。次節では平城京内の寺院での食堂はどのような構造であったかを述べたい。

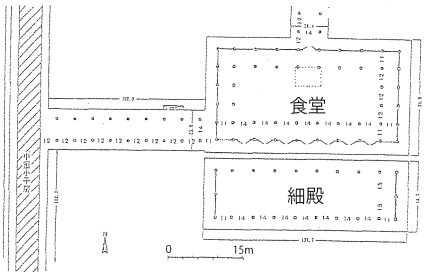
第2節　中央官寺の食堂

1．興福寺

興福寺の食堂は講堂東域で確認されている（第1図）。食堂は桁行9間×梁行5間の礎石建物である。柱間寸法は、桁行の中央7間は14尺等間で、端間は11尺の計120尺である。梁行は、中央3間が12尺等間で端間は11尺の計58尺である。その前面に、桁行9間×梁行2間の細殿と呼ばれる建物が確認された（第2図）。この建物の桁行寸法は食堂と一致し、桁行計120尺で梁行は15尺等間で計30尺である。前殿の機能は、大安寺でこれに似た構造建物が検出され、大安寺では礼堂的機能を果たしたと考えられ（上原2014）、興福寺でもこれと同様の機能が想定される。両者含めた基壇規模は東西132尺×南北120尺で壇上積基壇である。周辺からは瓦塼類が出土していることから瓦葺き建物であるとされている。また、これらの施設に向かって東僧坊から食堂にのびる軒廊跡と食堂から『興福寺流紀』に見られる盛殿に向かってのびる軒廊跡が確認されている。出土遺物は緑釉陶器や黒色土器といった土器類、灯明皿、風鐸などが出土している（奈良国立文化財研究所1959）。



第1図　興福寺全体図



第2図　興福寺食堂跡

2．東大寺

東大寺の食堂院に関する遺構は食殿跡、食堂跡に比定される建物跡が講堂跡東側の地区で確認された。食殿と考えられる遺構は礎石据え付け跡、又は、柱穴とされる土壙が6間分確認された、重複関係から2時期の建物があったことが確認された。2時期目の遺構の柱間は4.05 m等間でSB50と称される。このうち、SB50の礎石据え付け土壙とされるSK10・17の礎石に焼失した柱痕が残り、SB50が焼失したことが分かる。この周辺の状況から、この建物が焼失した時期は治承4年（1180）に焼失したことは確実視される。前述したSB50より以前の建物はSB51と呼ばれ、2間分の柱間が確認された。柱跡とされるSK16・18の間は礎石がないことにより正確ではないが、5.6 m前後で19尺と考えられる。SB51

の雨落ち溝と推定されるSD04とSD26の芯々距離は26.96 mを測り、90尺と推定できる。よって、梁行は1間19尺等間として4間76尺で、雨落ちまでの心々距離各7尺と推定できる。また、南面には軒の部分に使用された礎石や凝灰岩列が発見された。石列上からは改范以前の平城宮系6234a型式の瓦が出土した。雨落ち溝からも平城宮6732 F、6733 F型式の瓦が出土し、これらの組み合わせが食殿創建期に使用された瓦と推定される。また、この溝からは食殿が存続した期間の須恵器や土師器、灰釉陶器、製塩土器などが出土している。正倉院所蔵の「講堂院古図」を基に復元すると食殿に比定され、ほぼ同規模である。「講堂院古図」によれば食殿は桁行11間×梁行4間の東西棟に復元され、ほぼこの図のように施工されたものと考えられるが、今回の調査では詳細は不明である（第3図）。

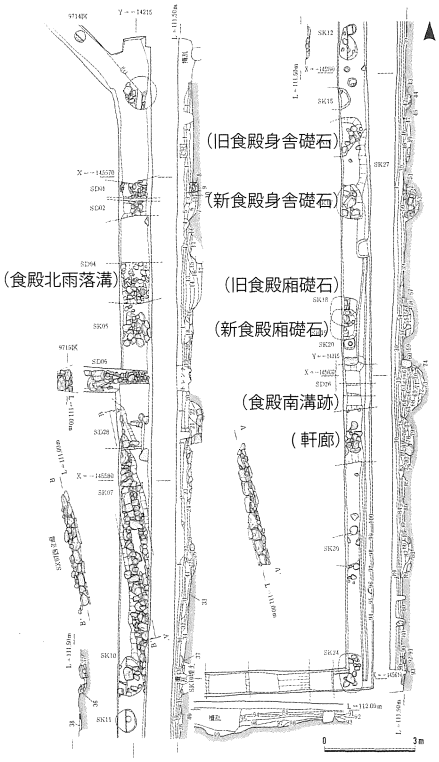
食堂跡の全体の様相は不明であるが、基壇の延石と推定される基壇外装が確認された。延石設置の覆土から奈良時代と思われる土師器片が出土した。この時期に建てられた食堂の基壇の南辺とするならば「講堂院古図」に示された伽藍と異なるもので伽藍配置の再検討が必要とされる。

これらの施設を区画する築地塀等は現在の発掘調査では確認されていない。食堂院の範囲に相当する部分の発掘調査では須恵器・土師器・製塩土器などの遺物が溝跡など施設に関連する遺構から出土している（平松2000）。

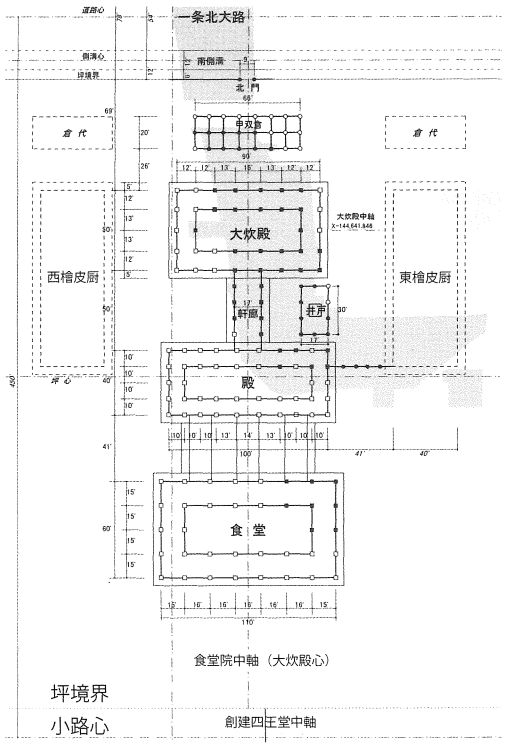
3．西大寺

西大寺の食堂は講堂北東域にその存在が確認された（第4・5図）（奈文研2007）。『西大寺資材帳』によると食堂院は食堂や殿、大炊殿等により構成され、近年の発掘調査で殿と大炊殿に比定される建物跡が確認された。

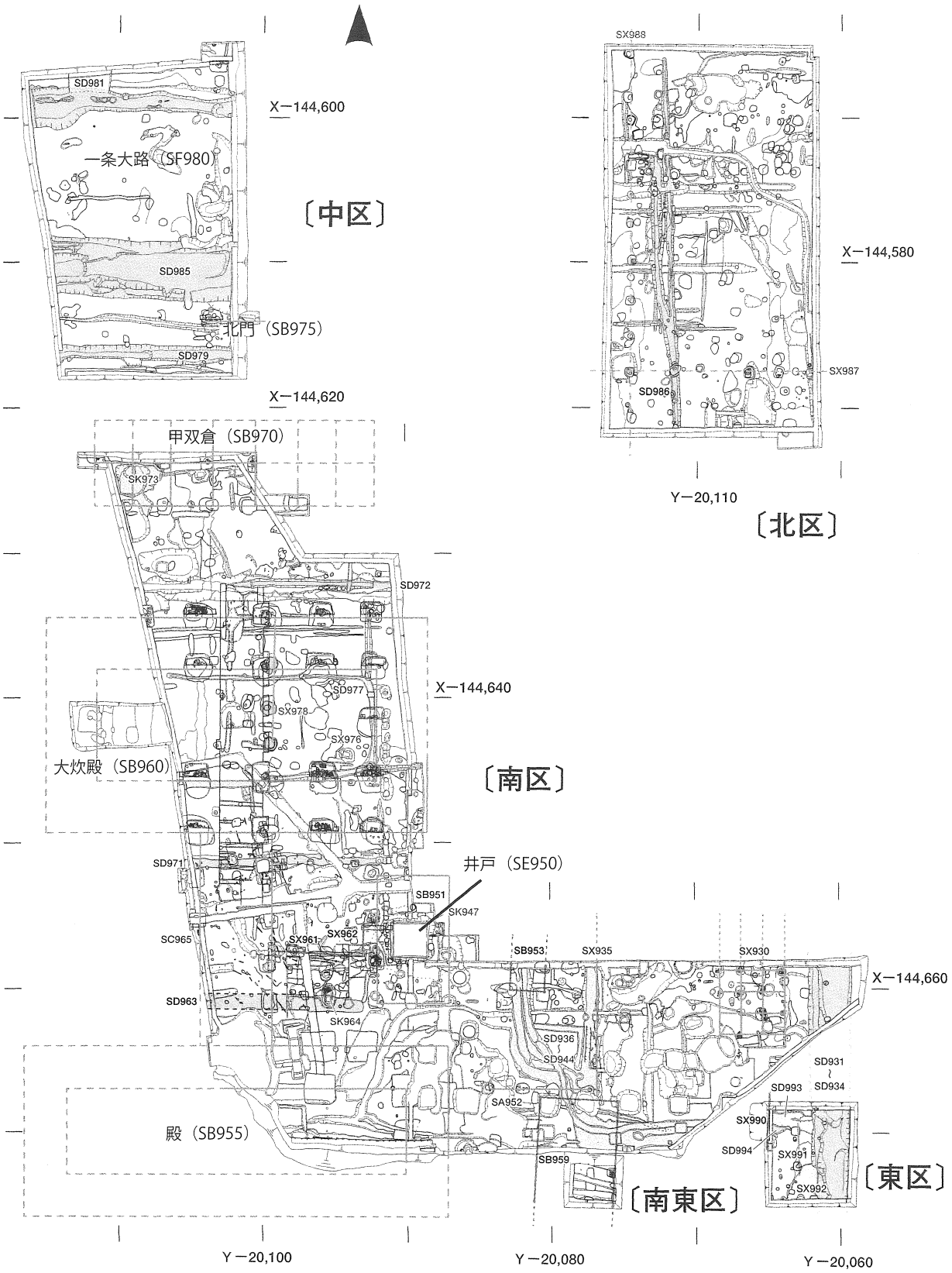
まず、殿跡に比定される建物跡はSB955であ



第3図　東大寺食殿跡



第4図　西大寺食堂院概略図



第５図　西大寺食堂院全体図

る。この建物は桁行３間、梁行１間が確認されている。柱間寸法は桁行、梁行ともに 3.0 m（10 尺）等間で後方にて確認された SB-960 の中軸線で折り返すと桁行 30 m（100 尺）×梁行 15 m（50 尺）となる。

殿跡の後方で確認されたのは大炊殿に比定される SB-960 である。基壇建物で桁行７間×梁行４間の建物と考えられる。基壇規模は東西 30 m×南北 18 mと推定され、柱間寸法は桁行 27 m（90 尺）×梁行 15 m（50 尺）と想定される。周辺には雨落ち溝が回っている。礎石据付穴は坪堀り地業を施す。地業の中心部はには、人頭大の石を埋め込む。

殿跡と大炊殿の間の東側に井戸跡（SE950）が確認された。井戸跡は井籠組の井戸は一辺約 2.3 mで深さ 2.8 mである。井戸の底面には浄水用に直径３cm 前後の円礫を敷き詰め、その上に木炭を敷く。出土遺物の出土状況から８世紀末には廃絶され、短期間の使用状況であったと考えられる。また、井戸跡の周辺には掘立柱の柱穴８基が検出された。桁行３間×梁行２間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行約３m（10 尺）×梁行 2.6 m（8.5 尺）で後述する軒廊跡（SC965）の梁行方向と柱筋をそろえ、全体の規模も等しい。

その他に、築地塀は確認されていないが、それに伴う食堂院北側の雨落ち溝（SD979）が確認され、築地塀により区画されたことが想定される。また、築地塀に伴う北門（SB975）が確認された。掘立柱の柱穴（２基）が確認され、柱間は約 2.7 m（９尺）である。殿跡と大炊殿の間は軒廊跡（SC965）によりむすばれており、軒廊跡桁行３間、梁行１間の礎石建ちで、柱間は桁行３m（10 尺）、梁行 5.1 m（17 尺）である。殿跡の身舎北柱筋より東側にのびる掘立柱塀（SA952）も確認された。

出土遺物は製塩土器や須恵器が大量に出土している。また、瓦塼類も大量に出土していることから食堂院すべての建物に葺かれたかどうかは不明だが、食堂などの主要な建物は瓦葺建物であると考えられる（川越ほか 2007）。

４．西隆寺

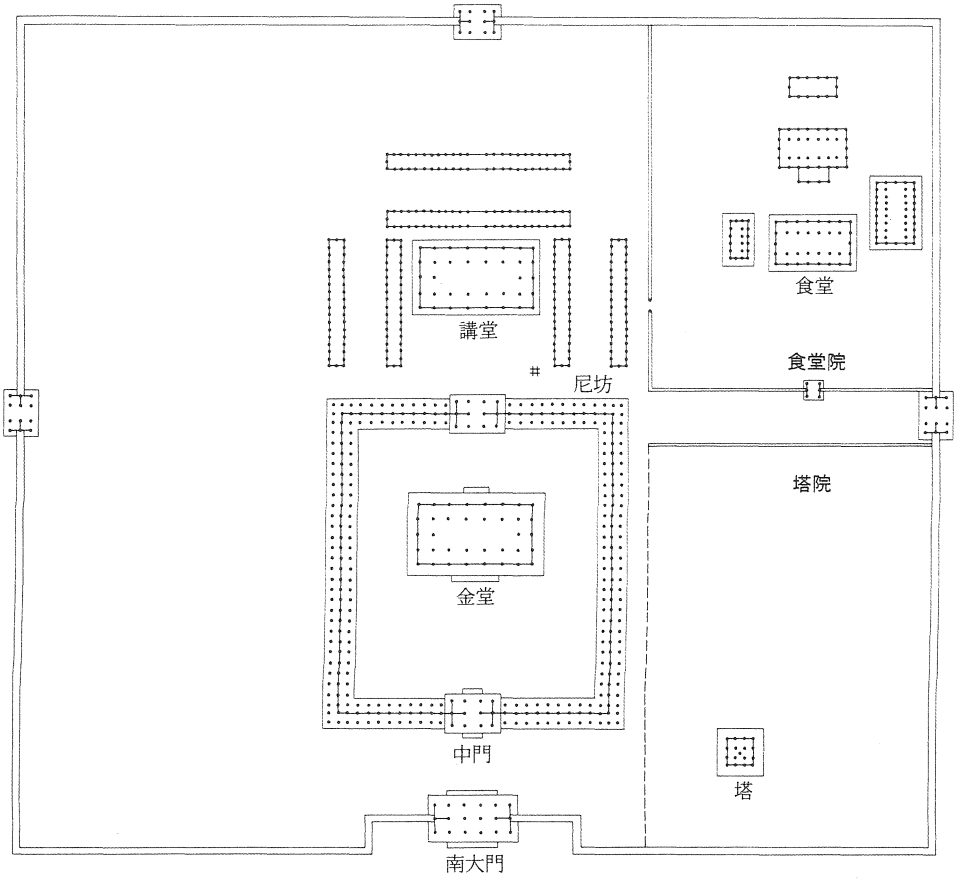
西隆寺では『西大寺資材帳』で記載されている食堂・殿・大炊殿・東厨・西厨に比定される建物が発見された。また、これらを区画する築地塀やこれに伴う門跡、井戸跡が確認された。これらの建物は講堂の東側で確認された（第６図）。食堂院は創建期と整備期の２時期に区分される。創建期の食堂院はすべて掘立柱建物で第７図のような配置で造営された。その後、食堂や厨等は礎石建物に建て替えられ、第８図のような配置になることが明らかになった。創建期の建物構造は以下である。

食堂跡は SB490 に該当し、当初は掘立柱建物で建てられ、これを SB490 A とし、その後、礎石建物に建て替えられ、SB490 B となる。桁行７間の柱間は 2.95 m（10 尺）等間、梁行４間の柱間 2.95 m（10 尺）等間であり、掘立柱から礎石建物に変わる時も同様の規模で建て替えられた。

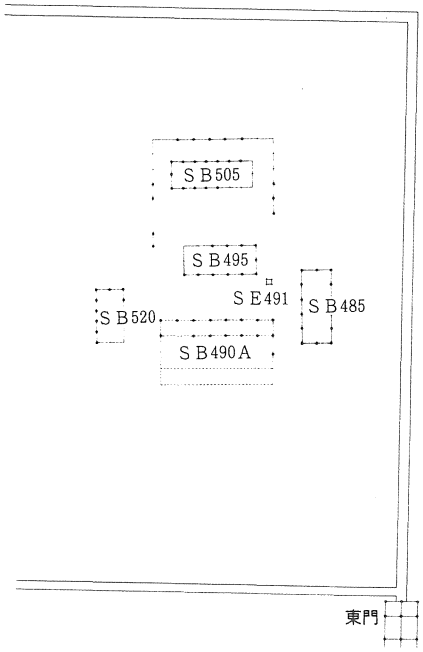
殿跡は SB495 に比定され、桁行５間 2.65 m（９尺）等間、梁行２間 2.65 m（９尺）等間の東西棟掘立柱で建てられた。

大炊殿は SB505 に比定され、西妻から６間分を検出したが、周辺の遺構との関係から桁行７間と推定される。廂は持たず、桁行は 2.1 m（７尺）、梁行 2.4 m等間である。周辺は東西柵列である SA501 と南北柵列である SA506 で囲まれている。

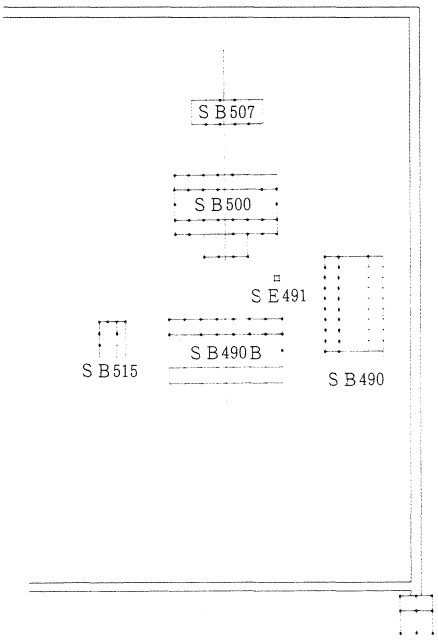
東厨は SB485 に比定され、桁行５間以上の 2.65 m（９尺）等間、梁行２間の 2.65 mである。南北棟の掘立柱建物である。西厨は SB520 に比定され、桁行５間以上の柱間７尺弱、梁行２間の８尺等間である。南北棟で掘立柱建物である。



第６図　西隆寺全体図



第７図　創建期食堂院配置図



第８図　食堂院整備期配置図

SE491（井戸跡）は四面を板材で囲まれいわゆるせいろ型であり、扉板を転用されたものであることが判明した。柱掘方は一辺3.6m.前後の隅丸方形型である。若干の木製品及び延喜通宝の他に、大量の土器が出土した。9世紀後半代の緑釉陶器片を含む。抜き取り穴と井戸底の土器類はほぼ同時期のもので、年代は延喜通宝よりもさらに新しい。創建期から使用されている。

食堂院は築地塀で区画され、北側の築地であるSA600が確認された。北面にはSB608と称される門跡が検出された。規模等は不明だが、一辺1.2mの略方形で、多数の根石を留めることから礎石立ちであった可能性がある。また、西側の南北築地塀が存在したと推定される位置から掘立柱の一間門（SB540）が確認された。棟門で柱間は3.0m（10尺）、柱掘方は一辺1mの方形でいずれも柱根を留める。底には石・瓦を敷いて礎盤とする。

その他に、食堂内を区画したと思われる東西柵列（SA535）や創建期に造られたSX533と称される木樋が発見された。

その後、奈良時代末期から平安時代初頭にかけて食堂院一帯が大改修を受け、掘立柱建物から礎石建物へと再整備される。

食堂は前述したように、同規模の礎石建物に建て替えられることが分かった。

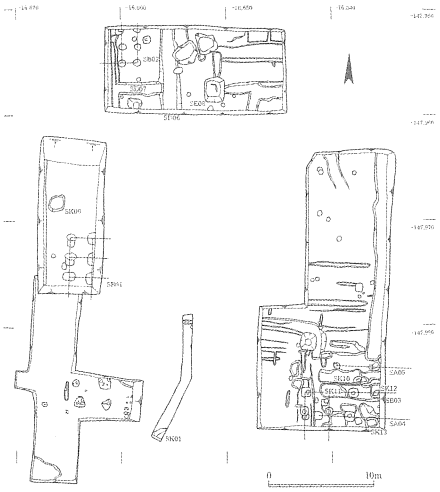
殿跡はSB500に建て替えられ、桁行7間の東西棟南北二面廂付の掘立柱建物である。柱間は桁行・梁行ともに2.65m（9尺）等間である。建物前方に中央部3間と柱筋を揃えた4つの柱穴があり、これらを階隠と推定される。柱間10尺のSB490とは梁行の柱筋が一致しないが、建物東西中軸線が一致する関係にある。両者の方位が等しく、妻柱間の距離が26.7m（90尺）となることから計画性が認められ、同時期と推定される。創建期の大炊殿からやや後方にSB507に建て替えられ、桁行5間×梁行2間の東西掘立柱建物と推定される。桁行は2.7m（9尺）等間である。東厨はSB480に建て替えられ、南北礎石建物へとなる。桁行は9間以上で柱間は1.9m等間で尺の完数値にならず、6尺5寸と推定しえるほか、ある距離を等分した結果とも考えられる。梁行は2.7m（9尺）等間である。また、北側に接した東西溝（SD484）は雨落ち溝と考えられる（山崎1993）。

5．大安寺

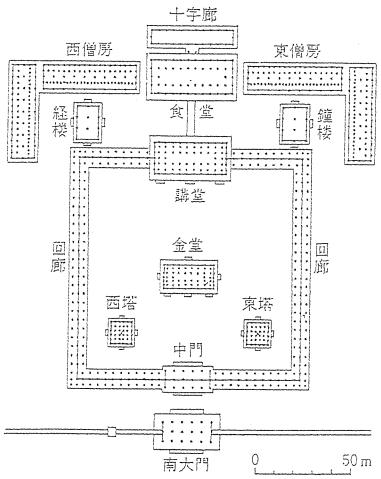
『大安寺資材帳』では大安寺に充てられた15坊のうち1坊半が食堂院に充てられているが、厳密な位置は記載されていない。大安寺の食堂跡はこれまでの研究から講堂跡の北側に建てられたと考えられた。しかし、講堂北側の発掘調査を実施したところ、この場所に建てられなかったことが確実になった（奈良市教委1997）。近年では講堂跡の東側に設けられた可能性が指摘されている（大岡1966、上原2014）。発掘調査からも食堂に関連すると思われる建物跡が確認されている。発掘調査によると凝灰岩切り石積基壇をもつ桁行4間以上×梁行1間の南北にのびる礎石建物跡を検出した。建物の周辺には大量の瓦や三彩片や緑釉土器などが出土し、食堂前の廊跡と考えられた（橿考研1977）。さらに、その東側では数棟の掘立柱建物・礎石建物・井戸跡などが検出された（図9）（橿考研1977、奈良市教委2002）。柱穴や土壙から須恵器・土師器・製塩土器が大量に出土し、食堂や大衆院関連施設の可能性がある。

6．薬師寺

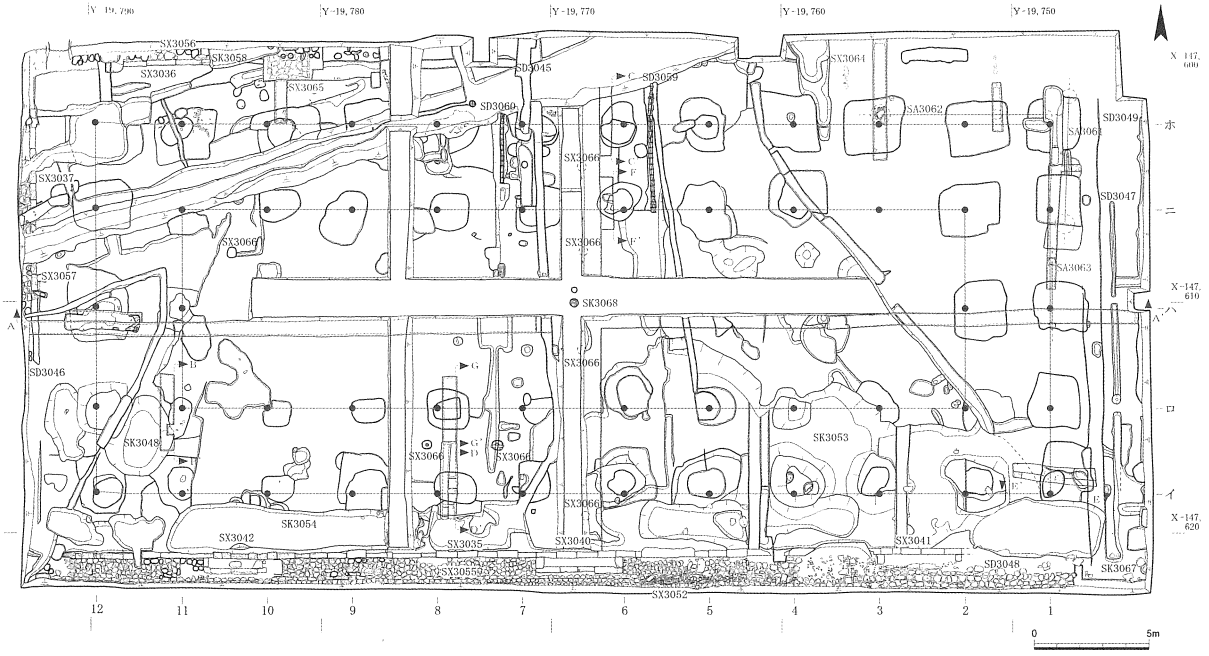
薬師寺の食堂は講堂の北側で確認されている（第10図）（青木2013）。食堂は桁行11間×梁行4間の東西礎石建物で、基壇規模は東西47.1m×南北21.6m（159.1尺×73.0尺）である。柱間寸法は桁行140尺×梁行54尺である（第11図）。桁行の中央間は15尺でそれ以外は14.5尺とし、梁行は身舎2間分を14.5尺で廂部



第９図　大安寺推定厨跡



第 10 図　薬師寺全体図



第 11 図　薬師寺食堂跡

分は 12.5 尺である。また、礎石周りは坪地業がされている。基壇の周辺には雨落ち溝（SD3048）が廻り、基壇上には石敷きが確認された。出土遺物は大量の瓦類や須恵器・土師器・奈良三彩が出土している。

一方で、西大寺や興福寺では食堂をはじめ、厨や倉といった諸施設を含め食堂院を形成しているが、薬師寺では厨や倉などの運営施設は別の空間にある可能性がある。『薬師寺縁起』によると、承平２年（1075）の「僉議」の記事にある「新録」で政所内に大炊院が置かれたと記載されている。食堂院を含めた政所院は寺院地内の北西域に置か

れたことが記載されている(奈良国立 1987)。「僉議」は薬師寺が成立してから 250 年近く経過しているが、後述する豊後と淡路の例を見ると寺院地の北西域に厨などの関連する建物が存在した可能性は高いと考える。

これらをまとめると平城京遷都後の食堂院の特徴としては次のように挙げることができる。①食堂の建物規模は 9 × 4 間、7 間× 4 間など仏教建築の構造であること。②食堂や殿など儀式が行われたと考えられる堂宇は瓦葺や礎石立ちの構造である可能性がある。③大炊院や食堂が置かれた位置は講堂や僧坊の北側（註 1）または講堂の東側に置かれる。④出土遺物は坏などの食事に関わる遺物が多く出土すること。⑤講堂の東側に設けられた場合は築地塀などで区画され、食堂や厨など食堂院に関連する建物がすべておかれ、「院」として独立した空間ができる。が挙げられる。

平城京の食堂院は興福寺・東大寺・西大寺・西隆寺・大安寺のように講堂の東側に食堂院を形成するのが主流になると考えられる。一方で薬師寺は講堂の北側に食堂を配置されるのは、白鳳期から続く様式を引き継いだものと推定される（註 2）。次節では、これらの特徴をもとに、地方官寺である国分寺の食堂やそれに類する可能性のある建物について述べたい。

第 3 節　国分寺の食堂

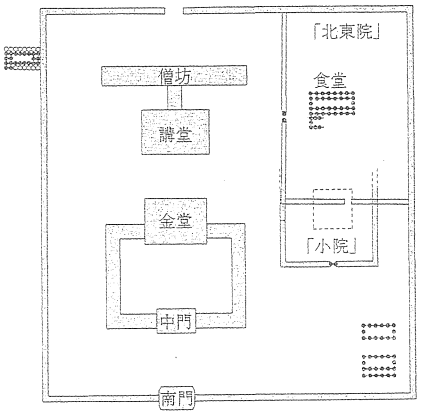
1．伊勢

伊勢国分寺では講堂跡北東で食堂跡や前殿跡、区画した築地塀等が確認された。食堂跡は SB0302 に比定され、7 間× 4 間の東西棟掘立柱建物であったことが明らかになった。柱間寸法は桁行 10 尺等間（計 70 尺）、梁行 8 尺等間（計 32 尺）である。

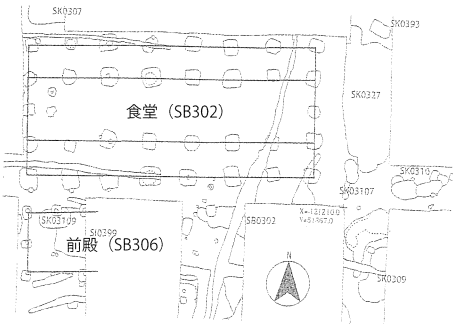
その南面に前殿跡（SB0306）は 3 間以上× 2 間の東西掘立柱建物であることが明らかになった（第 12・13 図）。掘立柱建物か坪地業を伴う礎石建物か判然としないが柱掘方は 1.5 m× 1.3 mである。前殿跡は西妻を揃え、柱間寸法は桁行が 7 尺、梁行が 7.5 尺と確認された。この双堂（ならびどう）建築となる建物は前述した興福寺食堂院と類似する構造である。ただ、興福寺食堂の双堂建築は桁行柱間をそろえるのに対し（奈良国立 1959）、伊勢では柱間は揃わないという相違点があるが、おおよそ同様な機能であると考える。また、食堂周辺は築地塀で区画され、棟門を設けそこから中心伽藍との行き来が可能となっていることが判明している（藤原・林 2003）。

2．近江

近江国分寺では講堂の北東域に礎石建物が確認されている。詳しい様相は不明であるが、桁行 7



第 12 図　伊勢国分寺全体図

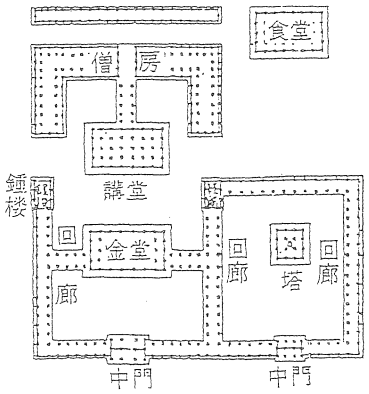


第 13 図　伊勢国分寺前殿・食堂跡

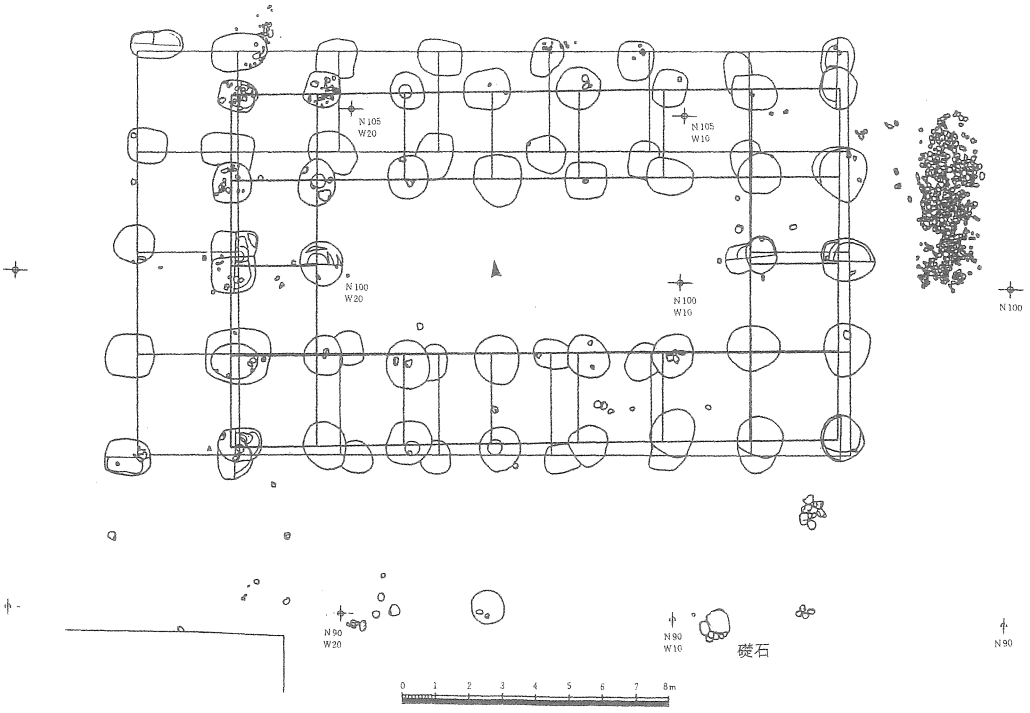
間×梁行４間で復元され、配置されている位置から食堂ではないかと推測される（第 14 図）（畑中・大道 2011）。

３．豊後

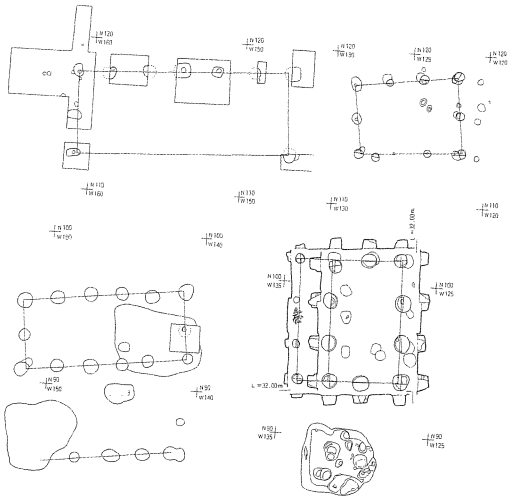
豊後国分寺の講堂跡から北に 32 mの地点で桁行７間×４間（71 尺× 40 尺）の東西掘立柱建物が発見されている。桁行方向の柱間寸法は中央間で 11 尺であるのに対し、残りは 10 尺となり桁行合計 71 尺となる。梁行は 10 尺等間で合計 40 尺である（第 15 図）。また、柱の埋め込みに黄色粘土質土、暗黄褐色土などの混入した土が２～４段に層位をなしていることが明らかになっている。この掘立柱建物の北側と西側の土壙から皿、小皿、椀、杯など、食事に関わる土器が出土していることや高台椀に「院」と書かれた墨書土器が出土していることを考慮すると食堂の周辺に大炊院などの付属施設が置かれた可能性が高い。現に、北西域の調査でも掘立柱建物が複数棟確認されている（第 16 図）。中には３間×３間の西面廂付南北棟建物や南に塀状遺構を備えた桁行５間×梁行２間の東西建物も確認されている。この建物一帯にも土坑がいくつも確認され、杯や甑とった遺物が出土していることから厨などの施設ではないかと考える。先ほどにも食堂の周辺に大衆院



第 14 図　近江国分寺全体図



第 15 図　豊後国分寺食堂跡



第16図　豊後国分寺北西域建物跡

の位置を示唆したが、大炊院の実質的な機能はこの北西域一帯に置かれたと考えられる（大分市教1992）。以上を踏まえると、講堂の北側に食堂を配置し、その北西域に大炊院と想定される施設が確認されることから、薬師寺の大炊院と同じ形態ではないかと考えられる（註3）。

4．讃岐

讃岐国分寺では独立した堂ではなく食堂が僧房内に置かれたことが考えられている（第17図）。僧房の中央間3間×3間では各坊に見られる構造とは異なり、柱間には凝灰岩切石と塼による地覆が見られず開放的な空間であったことが明らかになった。こういった構造は薬師寺や法隆寺、鎌倉時代に再建された東大寺戒壇院の食堂の位置や構造を参考に中央3間の空間を食堂に充てた可能性がある（松尾1986）。

5．相模

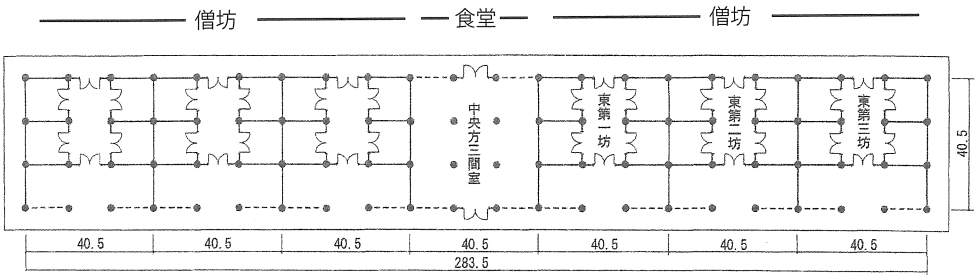
相模国分寺では僧房の北側の伽藍中軸線上に掘立柱建物が確認された（第18図）。全面調査が行われておらず、確認された規模は桁行4間（10尺等間）×梁行2間（10尺等間）と南に1間（12尺）の廂がつき、伽藍中軸線との関係から7間と推定されている。機能としては国師院を想定しているが（須田2012）、推定された建物規模と伽藍中軸線上に位置することを考慮すると食堂として機能を想定する必要もあると考える。

6．淡路

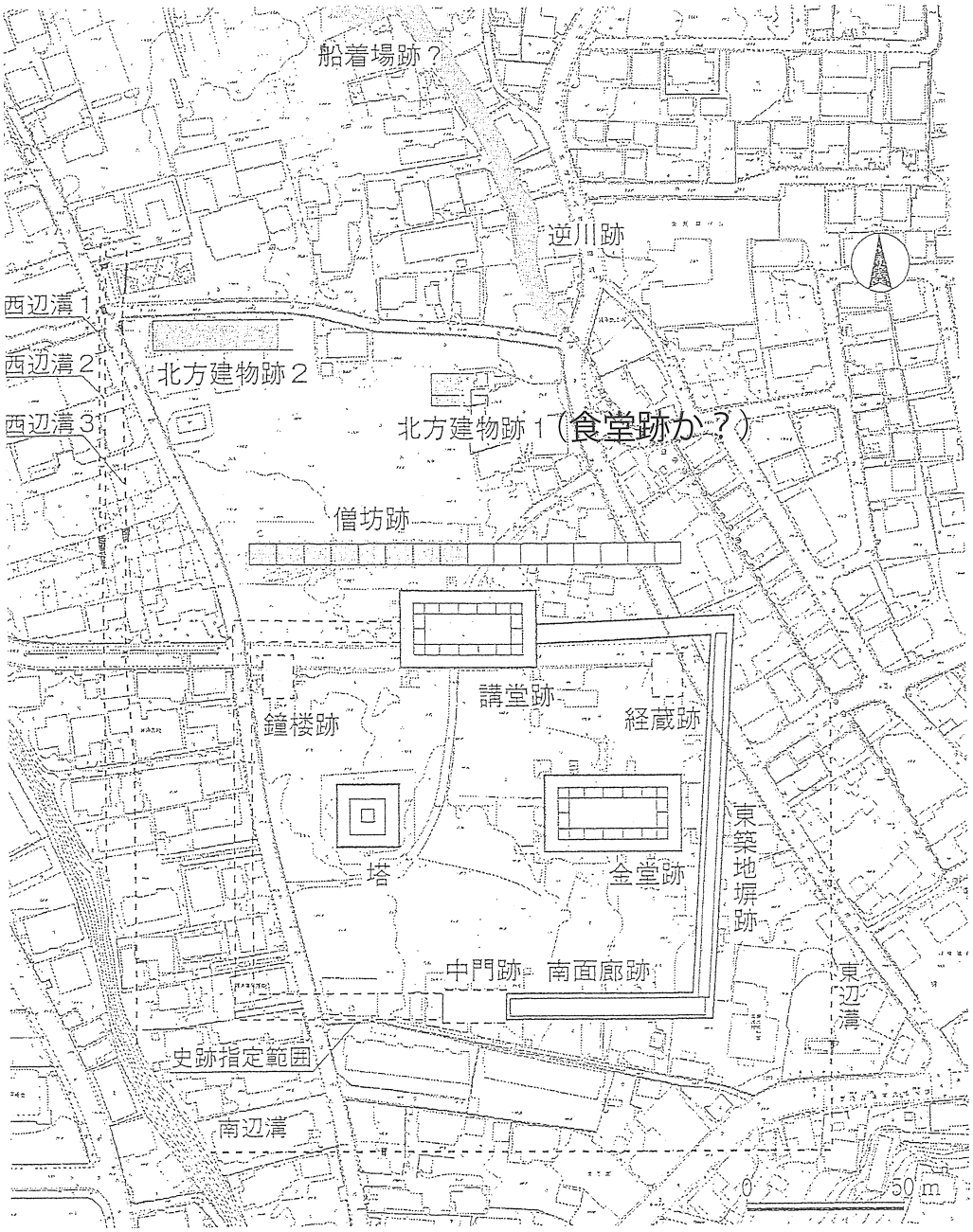
淡路国分寺の北西域で基壇建物と掘立柱建物が確認されている。基壇建物の梁行方向は3間と判明し、柱間は北から2.4 m（8尺）×3.0 m（10尺）という数値が得られ、南側は2.4 m（8尺）と推定される。基壇の規模は南北12 m（40尺）である。基壇の北側には土器や瓦が多く出土し、中には焼土や炭が混じっていた。創建期の瓦が多く含んでいることや建物軸が伽藍中軸線と同じであることから創建期の建物である可能性がある。また、基壇建物の北側7 mほどに2 m間隔の柱穴列が発見され、掘立柱建物になる可能性が高い。建物軸は伽藍中軸線と同じで前述した基壇建物同様、創建期にかかる遺構である。また、基壇建物の片付けに伴う土坑から豊富な土器類が出土していることから食堂か僧房といった建物である可能性を指摘している（濱崎1993）。筆者は出土遺物の様子や建物規模・位置から食堂に関連した施設を指摘するが、この位置でこういった機能を司る建物としては、食堂そのものよりは薬師寺に見られるような大炊院の機能をもった施設ではないかと考える。

第4節　食堂の構造

古代寺院における食堂は食事を行う場としての機能だけでなく様々な儀礼を行う重要な空間であり、その機能は建物構造に現れることが明らかになった。この食堂院の形態についてまとめたい。まず、食堂院が置かれた位置は講堂から東側・北東側に設けられる傾向が強い。食堂院は食堂に関わる施設を築地塀等により区画され、「院」を形成していた。食堂院の中には食堂をはじめ、厨



第 17 図　讃岐国分寺食堂跡



第 18 図　相模国分寺全体図

や大炊殿、倉・井戸などの主要・運営施設が置かれた。

一方で、平城京遷都以前の寺院で食堂が確認されているのは四天王寺（大谷女子大 1986）や百済寺（大竹ほか 2015）が挙げられる。これらの寺院は講堂の北側に建てられ、厨などの施設は周辺で確認されず、他所に設置された可能性が高い。それが、平城京遷都後に食堂や厨などを一箇所にまとめ「食堂院」に形成されるのは藤原京の寺院と平城京の寺院の占地の変化と考えられる。藤原京では塔や金堂といった主要伽藍や大衆院は方４町四方の範囲で形成された。その後、平城京に遷都するとこれらの施設の他に薗院や賤院といった施設も含めるようになり、９～12町の規模に拡大する。そうした寺院の構造の変化が見られ、食堂院も再編成されたと見られる。

また、国分寺といった地方官寺でも６ヶ所で食堂と見られる建物が確認されている。大官大寺式伽藍配置など白鳳期の伽藍配置になる国分寺では講堂の北側に食堂が設けられる。一方で、近江・伊勢国分寺は東大寺式伽藍配置で講堂の東側で確認された。地方で東大寺式伽藍配置が確認されているのは国分寺のみで、これらの国分寺は平城京遷都後に見られる講堂の東側に食堂が設けられる。これまで、地方になかった形式で国分寺の食堂がつくられることから、工人の派遣などで平城京から技術や形式の伝播が見られると考える。

おわりに

平城京遷都後の食堂は講堂の東側に食堂院を形成する様式が主流になると考える。その背景には藤原京から平城京に遷都するにあたり寺院の占地の変化によるものと考えられる。一方で、古い様式である講堂の北側に食堂が見られるものもあり、特に国分寺で確認される。食堂に関する研究課題も多く、食堂、大炊殿、殿といった主要建物の性格、地方寺院における食堂の様相、白鳳期における食堂の形態など多岐にわたる。今後も上記の内容もふまえて分析を続けていきたいと思う。

註１　伽藍中軸線上や金堂・講堂の中軸線上に置かれた可能性が高い。

註２　唐招提寺の食堂も講堂の北側に設けられた。

註３　『薬師寺縁起』では北西域に大炊院を配置することについては既に述べたが、同じ場所に政所院を配置したと見られ、この機能についても考慮する必要がある。

引用・参考文献

青木　敬　2013「薬師寺食堂の調査」『紀要　奈良文化財研究所』奈良文化財研究

上原真人　2014「資材帳が語る大安寺の不動産」『古代寺院の資産と経営』すいれん舎

大分市教育委員会　1992『国指定史跡豊後国分寺』大分市教育委員会

大竹弘之ほか　2015『特別史跡百済寺跡』牧方市教育委員会

大谷女子大学資料館　1986『四天王寺：食堂跡―食堂再建計画に伴う発掘調査報告書―』

川越俊一　2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』奈良文化財研究所

須田　誠　2012『史跡相模国分寺跡―遺構編―』海老名市教育委員会

奈良国立文化財研究所　1959『興福寺食堂発掘調査報告』興福寺

奈良国立文化財研究所　1987「考察」『薬師寺発掘調査報告』

奈良文化財研究所　2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』奈良文化財研究所

畑中英二・大道和人　2011「近江国分寺」『国分寺の創建』思想・制度編　吉川弘文館

濱崎真二　1993『淡路国分寺』三原町教育委員会

平松良雄　2000『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書』発掘調査篇　東大寺

藤井恵介　1994 「醍醐寺における布薩と仏像」『中世寺院と法会』法蔵館
藤原秀樹・林　和範　2003 『伊勢国分寺跡３』鈴鹿市教育委員会
堀池春峰ほか　1985 『東大寺お水取り　二月堂修二会の記録と研究』小学館
松尾忠幸　1986 『特別史跡讃岐国分寺―昭和 60 年度発掘調査概報―』国分寺町教育委員会
山崎信二　1993 『西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所
吉川真司　2010 「古代寺院の食堂」『律令国家史論集』塙書房

図版典拠

第１図（奈良国立文化財研究所 1959）、第２図（奈良国立文化財研究所 1959 一部改図）、第３図（平松 2000 一部改図）、第４図（川越 2007 一部改図）、第５図（川越 2007 一部改図）、第６図（山崎 1993）、第７図（山崎 1993）、第８図（山崎 1993）、第９図（上原 2014 一部改図）、第 10 図（奈良国立文化財研究所 1987）、第 11 図（青木 2013）、第 12 図、（藤原・林 2003）、第 13 図（藤原・林 2003 一部改図）、第 14 図（畑中・大道 2011）、第 15 図（大分市教育委員会 1992）、第 16 図（大分市教育委員会 1992 一部改図）、第 17 図（松尾 1986 一部改図）、第 18 図（須田 2012 一部改図）

研究紀要　第30号
—設立35周年記念—
2016
平成28年3月14日　印刷
平成28年3月18日　発行

発　行　公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　熊谷市船木台4丁目4番地1
http://www.saimaibun.or.jp
電　話　0493－39－3955
印　刷　朝日印刷工業株式会社